

特集「国語の力」を考える

― 情報を活用する力 ―

情報化時代といわれる現代は、ばくだいな情報にあふれた時代です。国語の力の一つとして、情報を「読む」「見る」「選ぶ」「使う」力が必要といわれていますが、どんな考えで、どんな方法で学ばなければならないのでしょうか。情報を活用するヒントについて考えてみたいと思います。



国語教室で育てる生きる力

産能大学経営学部教授 芳野 菊子
よしの きくこ

1 メディア・リテラシーは情報活用能力

「メディア・リテラシー」ということばを使うと「それなかに、国語に関係があるの」といわれ、「今、国語の時間が減らされて、基礎基本を身につけさせるといふ最低の目標を達成することだけでも大変なのだから、テレビだのコンピュータなどを取り込む余裕なんて全くない、それに設備だってまだまだ不十分で……」と、ことばが続きます。

メディアということばからは、マスコミ、テレビ、インターネットという新しいメディアだ

けが、漠然と頭に浮かびます。メディア・リテラシーということばを使い出したのがマスコミで、テレビ報道の見方という意味合いで使われ始めたのですから、当然といえば当然といえます。

そこで「メディア・リテラシー」ということばの成り立ちから考えてみることにします。メディアは媒体で、ことば自体も媒体ですし、教科書もノートも情報を伝達する媒体です。

一方、リテラシーは、英和辞典を引いてみると「読み書き能力」と出てきます。

直訳すれば「ことばの読み書き能力」ということになり、国語教育でつける力そのものだといいことになります。ことばは書物、ラジオ、テレビ、電話、インターネットなどさまざまな物理的メディアにのせられて情報を伝えます。これらの乗り物に乗ってことばが伝える情報を、聞いたり読んだりして獲得し、考え、再構築し、話したり書いたりして発信するという一連の活動が情報の活用です。

ですから「メディア・リテラシー」を、「情報活用能力」と言い換えることもできます。そう理解すると、なんだ今まで国語の時間に指導してきたことそのものではないか、ということになります。

自分の力をどこまでも拡大したいという人間の欲望はともなく、早く遠くへ行きたいがために、自動車や飛行機を発明しました。それと同様に、情報の伝達についても、速く、遠くに同時に大勢の人に伝えたい、という限らない欲望を実現するために、次々にさまざまな情報メディアを開発し続けてきました。

テレビ、ラジオのような強力なメディアだけでなく、だれでもが発信者になりうる電話、ケータイ、テプレコーダ、ビデオが普及し、さらにインターネットが急速に一般化するに及んで、情報を伝えるメディアの環境は一変してしまいました。

このようにメディアが肥大化してくると、耳で聞いたり、生の声で伝えたり、紙に文字を書い

国語教室で育てる生きる力

たり、書かれた文字を読んだりという基本的な手法での伝達だけでなく、電子メディアへの対応も学校教育の段階で取り上げていかなければならないのではないかとこの声が上がりはじめました。メディア教育の先進国と言われるイギリス・カナダ・オーストラリアなどでは、主として電子メディアを対象にした情報活用能力を、メディア・リテラシーと呼び、国語教育（英語）の中で取り上げています。

2 生き生きした国語教室

経験の少ない若い先生から聞いた話です。

「話す」「こと」「聞く」「ことを通して」「伝え合う」「ことの楽しさと大切さを体験させたいと工夫を重ねてきました。教材の読み取りをもとに話し合いを進めると、発言はどうしても理解レベルの高い生徒に限られ、大半の生徒は聞き手に終始して、授業が盛り上がりがないまま終わってしまうのをもどかしく思っていました。」

教科書で「マスメディアを通して現実世界」を学習した後のことです。自分たちの日常の話題の出所や、判断のよりどころにしている情報は、どこから得られたものかを話題にしたところ、生徒たちの意見は、身の回りで起こったこと以外は、ほとんどテレビの番組であるということに一致しました。

そこで、書き込み用の年表をプリントし、めいめいが物心ついているから現在までに見たテレビ番組の中で、心に残っている番組をできるだけたくさん書き込み「テレビ自分史」を作ってくる、という課題を出しました。宿題を出しても忘れる生徒が多いのに、このときばかりは量の多少はあっても全員が書き込みできました。

まず、グループごとに司会を決め、お互いの情報を交換しながら忘れていたものなどを付け加えて、自分の年表の書き込みを詳しくしていきました。

同世代ですから話題は完全に一致します。それぞれの年代で共通して視聴した番組を取り上げ、なぜその番組は人気があったのか、その番組を見たことでどのような影響を受けたか、良い点悪い点などに話を進めました。司会者は内容がよくわかっていきますから柱立てもしやすく、要領よく話し合いを進行させます。メンバーも自分自身の体験の中から取り出し用意した情報ですから、発言したくてたまりません。それまでの授業では見せたことのない、生き生きした生徒の発言や表情に心を奪われているうちに、時間はあっという間に過ぎてしまいました。次の時間は、発表のルールにしたがって、各班の話し合いの結果を発表しました。テレビというメディアの力の大きさに生徒自身が驚いたようです。

ざっとこのような話でしたが、ここまでの学習成果をもとに、次の段階として、現在の自分とテレビとの関係を振り返りながら、テレビを見ることは是非についてのディベートを計画しているということでした。

3 国語科はメディアを使って情報活用能力を育てる教科

先の「テレビ自分史」の授業は、情報活用 of 全ての段階をめぐりに網羅しています。

まずどんな番組があったかの情報を収集し、共通して話題にできる番組を選択し、内容によって整理し、テレビの影響について批判的に振り返りながら考え、ディベートでは、意見を組み立て、発信する、という具合になっています。

教室では教科書という活字メディアを軸に授業が進められますが、その学習の周辺に、テレビがあり、インターネットがあること、生徒はそれらによってもたらされる情報の渦の中に生きており、情報を発信する主体にもなるのだということをも念頭に置いて、授業を進めることが大事です。それは情報化社会にあつて、自分の人生を自分で切り開いていく力を育てることにつながります。